

The only full-color newspaper in Japan

# 東海新報

平成30年(2018年) 9月23日 日曜日

## つなぐ

77

### 東日本大震災と住田の心

## 「食と息抜き」のもてなしを

山あいの同館が大学生らの滞在所として本格的に利用され始めたのは、震災2カ月後の23年5月から。大学が夏休みに入ると、隣接する体育館でも多くの学生らが寝泊まりした。

洋治さんは学生や同行し

毒だと思った。夏場は暑い中作業をして五葉に戻ってき

て、夜は活動報告を行ったあとに、みんな一列になって横になる。一緒にいた教員からは「正直、まいってました」と本音も聞いた。

せっかく五葉にいるのだから、地域の食材を味わい、元

気を維持してほしい。それならば、学生を遠巻きに見守るしかできなかった地域住民も、力になれる。被災地で活動する人々を支えることも、復興支援になるの思いが日増しに強くなった。

23年夏、震災前から交流があった京都精華大学の学生が復興支援活動を終えて五葉から離れる際に「来年もまた来ます」と言われた。その時は必ず、楽しい思い出を残してほしい。翌年、「食と息抜きを楽しんでもらいたい」という思いを、川床に込めた。間伐材や竹などを寄せ集め、数日かけて16畳分の居場所をつくった。川床では地元産の豚肉や川魚などを焼き、学生たちにもふるまった。参考にした京都の貴船のような高級感や優雅さはなかったが、大胆に自然を楽しむ空間が学生たちに開放感を与えた。

本年度から五葉地区公民館長を務める藤井洋治さん(69)。近年、住田食材研究会の一員として気仙川での川床体験にもかかわっている。最初の川床づくりは、東日本大震災から2度目の夏を迎えた平成24年8月だった。

五葉を訪れた大学生たちにも、清流の涼をじかに感じてもらう。川や山の幸をふんだんに使った料理でもてなす。自然資源を活用する取り組みにも、震災から得た気づきが生かされた。

この時は同研究会に加え、地域資源を生かしたツーリズム充実などを見据える住田ふるさと体験協議会が共同で実

施。23年に町内で行われた観光と交流を生かした実践講座のワークショップの場で、京都市の貴船などで行われていた川床の取り組みが紹介され、地域資源を生かした観光振興を見据える人々の注目を集めた。

洋治さんには、多くの人々に住田の豊かな自然にふれてほしいとの願いがあった。さらに、復興支援の宿泊拠点となったこの地を訪れた若者にも、少しでも多くの思い出をつくらせてもらいたかった。

「ボランティアの人たちは、気の

## 学びの場を地域に中



23年夏、震災前から交流があった京都精華大学の学生が復興支援活動を終えて五葉から離れる際に「来年もまた来ます」と言われた。その時は必ず、楽しい思い出を残してほしい。翌年、「食と息抜きを楽しんでもらいたい」という思いを、川床に込めた。間伐材や竹などを寄せ集め、数日かけて16畳分の居場所をつくった。川床では地元産の豚肉や川魚などを焼き、学生たちにもふるまった。参考にした京都の貴船のような高級感や優雅さはなかったが、大胆に自然を楽しむ空間が学生たちに開放感を与えた。

川床は、地元内外の人々に前向きな希望をもたらした。研究会では25年以降も、夏になると気仙川に川床を設置し、涼を楽しむ風物詩として定着。住田の観光振興に、新たな展開が生まれた。

(日曜日掲載)